

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2022年度活動報告

Progress Reports on Mukogawa Women's University Center for The Study of Child Development 2022

河合優年*・難波久美子**・坂田智美***
中井昭夫*・玉井日出夫****

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SAKATA, Tomomi,
NAKAI, Akio, & TAMAI, Hideo

目次

1. 2022年度の取り組みについて
2. 外部資金の獲得について
3. 次年度に向けて

- * 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・教授
** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手・嘱託研究員
*** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手
**** 武庫川女子大学教育研究所客員教授

1. 2022 年度の取り組みについて

2022 年度は以下のような研究活動と成果の地域還元および成果発表を行った。

(1) コホート研究

<概要>

本研究は、子どもセンターの中心事業として継続しているものである。我が国において胎児期の情報を含めた成人期におよぶ追跡研究はなされていない。発達研究における国際競争力を高めるためにも、研究データの共同利用や若手研究者の育成など、国内の共同研究機関としての拠点化が必要である。これに関しては、発達心理学会においてその必要性が議論されている。

コホート研究の進捗状況に関しては今年度、引き続きパネル調査とともに、青年期の自我の形成や、友人関係といった項目について調査を実施した。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、引き続き、環境・健康調査を実施した。

協力者向けのニューズレターは、今年度も順調に発刊できた。今回は、新型コロナウイルス感染症の影響を確認するために実施した調査結果の一部を紹介する記事を掲載した。また、今回も“To Junior Researcher ～ Dr. Masa の人間ウォッチング”を発刊した。第 6 回目となる今号は、“アイデンティティの存在”をテーマに高校 3 年生に届けることができた。今後も中学生以降の対象児に対して順次送付する予定である。

中学校入学後、子どもたちからも質問や感想を受け付けており、それに対し直接回答が欲しい、ニューズレターでの一般的な回答が欲しい、という選択肢を設けている。今回も直接回答が欲しい、というケースがあったため、ケースカンファレンスを持ち、それぞれに回答を作成、本人宛親展にて送付している。

またデータセットのクリーニング作業は、残りのデータセットに関しても順次作業を継続している。

2022 年度は、科学研究費補助金の最終年度となるため、研究に関する報告書を作成する。報告書は、子ども発達科学研究センターの活動を国内外に発信できるよう、英語による Annual Report として作成した。海外への発信力を高めるためと SDGs の観点から、ホームページから閲覧できる web 形式を採用した。

<すくすくコホート三重>

すくすくコホート三重では、高校 2 年生には 3 学期にパネル調査と環境・健康調査を実施した。高校 3 年生には、11 月にパネル調査を実施した。

<武庫川チャイルドスタディ>

同様の枠組みで西宮市内（開始当時）の追跡研究である武庫川チャイルドスタディでは、中学 3 年生には、11 月にパネル調査を実施した。また、高校 1 年生には、6 月に適応調査を、3 学期にパネル調査と環境・健康調査を実施した。2022 年度も、対面での観察は断念し、Zoom を利用したインタビュー調査が計画された。都合がつかなければ、親のみの参加可能、Zoom への接続に不安がなければ、子どものみの参加も可能としたところ、20 組 33 名（親子 13 組、親のみ 6 名、子のみ 1 名）の協力が得られた。

(2) 子どもみんなプロジェクト

この取り組みは、文部科学省初等中等教育局児童生徒課のプロジェクトとして 2015 年度より、

「全国 10 大学と関係教育委員会との共同研究として進んでいるものである。2020 年 4 月からコンソーシアムの会長を大阪大学、副会長を武庫川女子大学、事務局を千葉大学として、弘前大学、浜松医科大学、金沢大学、福井大学、鳥取大学、兵庫教育大学、中京大学の 10 大学と連携教育委員会との共同研究として全国規模で研究が進められている。2021 年度は、西宮市教育委員会との連携で小学校入学から中学校卒業までの 9 年間、一人ひとりの子どもの心理状態を追跡し、不適応の予防を行うことを目的とした「こころん・サーモ」の学校現場への実装を進めている。2021 年度は、小学校 5 年から中学校 3 年までの児童生徒を対象としたチェック項目作成が完了し、オンライン調査が実施された。これらの実証研究を通じて、文章表現や、使用しているフォントをユニバーサル・フォントに変更するなどの調整がなされた。2022 年度の本格稼働に向けた準備を進めている。

(3) 学院教育への還元および地域連携

追跡研究において基盤としているシステムズアプローチとその理論および、明らかになってきた結果を素材として、大学院教育への還元を行っている。また、地域連携として研究成果の還元を専門職者に対して行っている。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策のため、昨年引き続き開催を断念した。

(5) Light It Up Blue, MUKOJO! 2022

文部科学省からの普及啓発の協力依頼も受け、2020 年度以降は、本学教育研究所の中井昭夫教授による特別経費「Light It Up Blue, MUKOJO! ～発達障害をキーワードとした大学教育改革と地域社会貢献への基盤整備～」により引き続き継続して開催している。

2. 外部資金の獲得について

2021 年度は科学研究費補助金（基盤研究（B）「コーホート研究による青年期における社会性の形成要因の解明と発達モデルの構築（課題番号：19H01759、2019 年度～2021 年度）」が継続されている。2020 年度、2021 年度と新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、活動の制限があった。そのため予算が消化できず、2022 年度に繰り越しが認められた。

3. 次年度に向けて

科学研究費補助金が、2022 年度に繰り越され、終了した。今回の補助金事業に関しては、新型コロナウイルス感染症対応のため、大幅に変更せざるを得なかった。これを含めて報告書を作成する。

また、2022 年度には、西宮市教育委員会との共同研究協定が結ばれた。今後の学校場面への実装等が円滑に進み、不登校やいじめ、自死等が起きないようにすることが期待される。